

# 「蚤虱馬の尿する枕もと」考

A Study of Basho's HAIKU

石 破 洋  
(国文教室)

Hiroshi ISHIBA

一

元禄二年(一六八九)三月二〇日(現五月九日)、芭蕉(四六歳)は曾良(四一歳)を伴なって深川を出船、おくのほそ道の旅の途についた。白河の関を越え、仙台、松島を経て石巻から真直に北上し、平泉に詣で、そこから日本海側へ東北の背稜山脈を横断する。今回の大旅行で最もおくのほそ道というにふさわしいこの横断ルートにおいて、芭蕉が庶幾した風雅風狂の旅はその極みに達しなければならなかったが、今や芭蕉はその殆んど真中に在ったのである。

五月一四日(現六月三〇日)晴天。一ノ関を発したが、暮に及んで雷雨に変わり、その後、曇り時々小雨、翌一五日(現七月一日)小雨の中、尿前の関に立った。尿前の関を過ぎ、出羽の国・堺田(現最上町)に入ったが、一六日は大雨で動けず、翌一七日、快晴の堺田を発した(以上、曾良『旅日記』による)。この間の『おくのほそ道』本文は左のごとし。

南部道はるかに、ミやりて、岩手の里に泊る、小黒ミつの小嶋を過て、なるこの湯より、尿前の関にかゝりて、出羽の国に、越むとす、此道、旅人、稀なる所なれば、関守に、あやしめられて、漸として、関をこす、大山を、のほつて、日既暮ければ、封人の家を見かけて舍りて求む、三日、風雨あれて、よしなき、山中に、逗留す

蚤虱馬の尿する枕もと

(河西本による)

旅の事実は芭蕉の記すところとは異なるが、それは問題ではない。なぜなら、「旅はまづうきものとおぼへ」(『続五論』旅論)、「うき目つらき目」(『鶉衣』旅論)を覚悟すべきであつて、「帰るさには質もやせつかれ麻のさ衣もしほればはてたる様に仕りならはし候」というのが「旅の本意」であつたからである(『連歌至宝抄』)。

従つて、疲労していてもいなくても、くたびれてたどり着いた宿の花を詠み(草臥て宿かる比や藤の花)、鷹の名所に在れば、いてもいなくても「鷹一つ見付てうれしいらご崎」(『笈の小文』)と詠むだろう。或は「道猶す、まず」(『笈の小文』)、「行く道なほ進まず」(『おくのほそ道』)と記す。事実は、吉野の花見にお気に入りの杜国といそいそ出かけ、或は、理想の旅の完成を目指し、曾良と二人で張り切って出発したとしても。

又、『笈の小文』においても『おくのほそ道』においても、絶景の前では句が詠めなかつたことにするだろう(事実は、吉野で「しばらくは花の上なる月夜かな」、松島で「嶋々や千々にくだけて夏の海」を得た)。

一体、芭蕉はどの旅も草鞋ばきで歩き続けのごとく記すが、事実はなかなかの健脚でありながら、江戸時代の旅の御多分にもれず、船、馬、駕籠を十分利用したらしい。例えば『笈の小文』の旅では、全行程の三分の一は駕籠であつたと計算した人もいるが、芭蕉の「送三計六一詞」には、

古より風雅に情ある人々は、後に笈を掛け、草鞋に足をいたため、破れ笠に霜露をいとうて、おのれが心を責めて、物の真を知る事をよろこ

べり。

とあり、『冬の日』巻頭に置かれた「野ざらし紀行」の旅の句に、

笠は長途の雨にほころび、  
帔衣はとまり／＼のあらしにもめたり。  
侘つくしたるわび人、我さへあはれにおほえける。むかし狂哥の才士、此国にたどりし事を、不図おもひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹斎に似たる哉

がある。類似の芭蕉発言は他にも多い。『連珠合璧集』下は、

旅とアラハ。……草枕。宿。……閑路。かりね。(かり枕)。……山越て。あつま路。うき世。……日かすふる。

などと記すが、これらの単語の多くは『おくのほそ道』(尿前の関)の条に配置されてある。

## 二

「尿前の関」の本文が『おくのほそ道』一篇の中の、いかにあるべき処にあるべき様に設置せられているかについては、既に、先学の指摘がある。例えば「この一章はまさに全篇の白眉」<sup>(1)</sup>、「ここがヤマのうちの最高のヤマ」<sup>(2)</sup>のごとし。本稿の中心は、紀行文の中のあるべき処にあるべき様に置かれた一句を『おくのほそ道』全篇の眼目と見做して、これを分析するにある。

蚤虱馬の尿する枕もと

この句は曾良の『俳諧書留』にも見えず、出典書の最も早いものは『韻塞』(元禄九年刊)であるから、旅中の成句でないことは、ほぼ確実であろう。ただし、後に、『おくのほそ道』一篇の、眼目の句として配置せられたものと推察される。

一句は「蚤虱馬の尿する」の上句と「枕もと」の下句から成立している。

「馬の尿する枕もと」と続くのではなく、「馬の尿する」で一旦切断される。上句は「蚤」、「虱」、「馬の尿」と、およそ風雅とはいえない言葉であって、それらの単語を事実通りに列挙しただけにすぎないように見える。従前、「眼前の憂苦の項目を数え上げ、それをそのまま投げ出す」とか、「無造作な仕立」とか評されることがあったのもゆえなしとしない。しかしながら、

この句が、時間をかけて、後に成立したらしいことを考えれば、「眼前の憂苦の項目を数え上げ、それをそのまま投げ出」したかのように、又、「無造作な仕立」であるかのように、工夫せられたのだということになる。

一体、このように単語を列挙した場合、いかなる結果を生じるであろうか。まず第一に、ある種のリズムの発生。この句の場合には、必ずしもはつきりとしたリズムではないが、かすかに生じる軽いテンポによって、旅人が決して只今の状態を嫌うているのではないこと、それどころか心のどこかで、密かに楽しんでるのかのような気配を提示する。又、動きの小さい蚤や虱という小動物から、一転、大きな動物へと飛躍し、馬の大きいスピード感を「馬の尿する」に転化して、句に勢いを加え、軽やかなリズムにスピード感やユーモアの感じも添えられて、旅人の心中の楽しさを伝えることに加勢する。

このようにして、単語の列挙に見える上句は、十分に工夫されたところのもので、その場でたちどころに浮かんで来るような句ではなかった。従って、「夜のくらがり」に、蚤、虱にせつかれながら寝られないままに、突如あまりに間近く(馬と)同居する羽目となった自分」などと述べて、芭蕉が実際に蚤虱に苦しめられながら、馬の尿する傍で一夜を過ごしたと考えた論者もあつたが、現在では認められないであろう。

又、例えば井本農一氏が、

東北地方の農家では、馬を厩に置かず、母屋の中に一角をかぎり、人馬同居することがつい先ごろまで普通のことであつた。<sup>(3)</sup>

と、あらためて説明されるまでもなく、地方の住人の、或は地方を知る人のよく承知しているように、牛馬は母屋内部に居たから「小屋」と言わずに「部屋」と呼んだのである。例えば「牛部屋に蚊の声くらき残暑哉」のごとし。

尾形仇氏は、

「枕もと」は、土間などに寝かされて文字通り枕もとに馬の尿の飛沫を浴びたのではなく、実際には客間などに寝かされたのであろうが、馬小屋を母屋内に設けるこの地方の家の構造に対するめづらしさの気分から、かく興じたのである。蚤・虱にせせられて寝苦しい夏の夜の浅い眠りの中で、暗がりに意想外に耳近く聞えた馬の放尿の響きが、

「枕もと」の語によつて、よくとらえられている。<sup>(4)</sup>  
と述べている。母屋内に牛馬を飼う構造が珍しいというのは、現代の都会の研究者であつて、芭蕉が知らないようなことではなかったし、枕もとで馬の尿の飛沫を浴びるなどは、尾形氏も言うように、農家の実際を知る者の失笑をかうだけであらう。

## 三

ところで、「蚤」と「虱」は付合語でもあり、何ら問題はないように見えるから、「蚤」、「虱」、「馬(の尿)」と列挙する際、「蚤」、「虱」に続いて「馬」、就中、「馬の尿」を持ち来つたところに作者の工夫があつたと考えられる。蚤や虱は芭蕉の他の句にも見られるところで、尿(しと)や糞(こえ)なども詠まれていないわけではないが、「馬の尿」は異例であらう。

「尿する」は、河西本や曾良本は「尿する」に作り、他に「ばりこく」(『泊船集』)、「尿こく」(『けふの昔』)、「尿つく」(『俳諧古今抄』)などの形が知られている。前田金五郎氏は、『日葡辞書』、『誹諧破邪頭正』、『箋注倭名類聚抄』などの用例を検討し、バリは馬、畜生、下賤の者の小便の意に用い、シトは人の小便の意にのみ使用したとして、バリとよむべきことを主張し、<sup>(5)</sup>太田絃子氏は、初案がバリコク、バリツクであり、成案がシトスルであつたと考えている。<sup>(6)</sup>ただし、当時の日常用語はバリコク、バリツクであつて、バリスルという形は存在しなかつたのであらう。

ただ、前田氏がシトスルは馬に使用しないから、バリが正しいとされるのは、詩語の理解の仕方としてはいかなるものであらうか。初案はバリコク、或は、バリツクであつたと思われるが、「尿前の関」であるから「尿する」と詠んだと見る考え方は捨てがたいし、又、バリコク、バリツクは日常語として俗っぽく、臨場感が強くて生々しいのに対して、シトスルはいくらか品もよく、臨場感も柔らげられよう。要するに、「蚤虱馬の尿する」がごとき旅の状態を提示すればよいとすれば、この点からもシトスルの方が芭蕉の意にかなうのではあるまいか。『去来抄』に、

でつちが荷ふ水こぼしけり

初は糞なり。凡兆曰、尿糞の事申すべきか。先師曰、嫌べからず。され

ど百韻といふとも二句に過ぐべからず。一句なくてもよからん。凡兆水に改ム。

とある。俗語を用い、事が鄙俗の上に及ぶもやぶさかではないが、辞あらく賤しく云なしてはならず、下品であつてはいけない。おのずと詩としての節度が要求されるから、俗語も詩語として正され、事は鄙俗に及ぶとも、懐しくいゝとるべきだという。

ところで、一言付言しておきたいのは、「尿前の関」で「尿」を詠むといった仕方は、言語遊戯にすぎないとされて、現今、過小評価せられやすいが、日本文学の歴史の上で、一つの伝統を為しているものであつて、『おくのほそ道』本文もこのような観点から読み直されるべきであらう。

## 四

抑、道の日記といふものは、紀氏・長明・阿仏の尼の、文をふるひ情を尽してより、余は皆倣似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして浅智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降、昼より晴て、そこに松有、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ／＼もいふべく覺侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其所／＼の風景心に残り、山館・野亭のくるしき愁も、且ははなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ所／＼跡や先やと書集侍るぞ、猶醉<sup>れ</sup>者の謔語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひに見なして入又亡聴せよ。

右の『笈の小文』周知の一節について、山下一海氏は、「旅先の事実を記録するだけでは紀行文としての意味がなく、そこには何らかの詩的な発見がなければならぬ」という主張をしているのだとし、旅吟についても「旅吟は事実をありのままに詠むというのではなく、そこに何らかの詩的な発見がなければならぬ」と考えていたに違いないと指摘しているが、<sup>(7)</sup>あえて付言すれば、その「発見」とは伝統文学が発見していないものでなくてはならなかった。

芭蕉は「黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ」(「糞虫説跋」)には「蘇新黄奇」を十分に実践し、伝統文学の詠まなかつた地方世界を見逃すこと

なく、「蚤・虱・馬の尿」と集めて列挙してみせた。すなわち、新しい「発見」である。しかしながら、これは新しい発見ではあるが、「詩的」な発見とは言われまい。このことについては後で述べる。

さて、「蚤虱馬の尿する」は十分な工夫が為された上で無造作を偽装して置かれた列挙であるが、今のところ、この情報だけでは、一体、作者が何を言わんとしているのかは不明である。もっとも、この情報だけでも些かのイメージを提供しないわけでもなく、例えば、蚤、虱に「馬」(の尿する)が付加されると、地方の農山村や田畑が想起せられやすいであろう(ただし、ここで農山村の母屋内部までイメージすることは困難であろう)。

土芳は『三冊子』の中で、

発句の事は行て帰る心の味也。たとへば、山里は万歳おそし梅の花、といふ類なり。山里は万歳おそしといひはなして、むめは咲るといふ心のごとくに、行て帰るの心、発句也。山里は万歳の遅といふ計のひとへは平句の位なり。先師も発句は取合ものと知るべしと云るよし、ある俳書にも侍る也。(くろさうし)

と述べているが、「山里は万歳おそし」はともかく、「蚤虱馬の尿する」では、土芳の言う「平句の位」にもなり得ていない。「行て帰る」とあるその「行て」に該当しないような情報の不足が感じられよう。

## 五

この上句に対して、下句「枕もと」はいかなる情報を付加し、平句とも言い難い上句を止揚して「行て帰る」発句として自立せしめるであろうか。一応、おさらいをしておけば、語を列挙しただけのごとく偽装し、実は、十分工夫をこらした上句「蚤虱馬の尿する」によって受け取る情報は、農山村や田畑、或は農家、山家のイメージを想起すると共に、そこに微かに生じているリズム、軽いテンポ、小動物の蚤虱から一転して大動物の馬に転じ、「尿する」と、勢い、スピード感を加え、且つ、微かなユーモアを感じ得せしめ、かくして、この人物がこれらを決して嫌うているのではなく、どこかしら楽しんでいような心中をさりげなく提示していた。

その人物は一体何者であるのか。下句はただ「枕もと」とあるだけであつ

て、彼がいかなる人物であるかは説明せられない。一体、この下句をもつて一句は完結し、自立したのであるうか。下句まで示されても、なお、依然として情報は不足しているのではあるまいか。

一人の人物は句の表には居ず、句の背後に居るのである。それは「枕もと」の語が提示する。そして次のごとき提示も行うだろう。すなわち、今は夜であつて、彼は横になってやすんでいる。横にはなっているが寝つかれない。なぜなら、苦しくつらい旅の「蚤虱馬の尿する」仮の宿りでは、そうあるべきはずであるから。しかるに彼はそれをどこかしら楽しんでいのかのようである。この「人物」が「ただの人」ではないことは明らかであろう。

彼は困難極まるみちのくの旅のハイライトにおいて、蚤虱馬の尿する仮の宿にやどる旅人であり、しかも、それを心中密かに興じては「うき目つらき目則風雅の種」(『鶉衣』旅論)とばかり一句詠む。これこそ風雅も極まれる姿、風狂そのものであつて、それゆえ、この人物こそ、実は風狂の旅人、風狂の詩人だったのである。そして、その風狂人とはほかでもない、私なのだとのり出る、それが「枕もと」の提示するところである(ただし、この「私」は必ずしも芭蕉でなくてよい)。

かつて、去来が「岩鼻やこゝにもひとり月の客」を作った時、

先師上洛の時、去来曰、酒堂ハ此句ヲ月の猿と申侍れど、予ハ客勝なんと申。いかゞ侍るや。先師曰、猿とハ何事ぞ。汝此句をいかにおもひて作せるや。去来曰、明月に山野吟歩し侍るに、岩頭一人の騷客を見付たると申。先師曰、こゝにもひとり月の客ト、己と名乗出たらんこそ、幾ばくの風流ならん。たゞ自称の句となすべし。(『去来抄』)とある。まさしく、「枕もと」の語によつて、風狂の旅人、風狂の詩人が「己と名乗出た」のだった。

芭蕉の句には、単語を羅列しただけのごとき作が他にないわけではない。例えば、「奈良七重七堂伽藍八重ざくら」、「梅若菜まりこの宿のころゝ汁」などであるが、「枕もと」と置いてのけた技術にはとうてい及ばないであろう。

付言すれば、この句は『おくのほそ道』一篇の眼目として旅後に成立し、更に、この句にふさわしい前文が後に付されたものと考えられるが、「尿前

の関「本文において、関守を言うのにわざわざ『論語』や『莊子』に見える「封人」の語を用い、「大山」、「風雨」、「山中」、「逗留」をはじめとする漢語や漢語的表現を多用するのは、力強いリズムを生んでいるだけでなく、本文の背景に漢詩文の世界を想起せしめ、同時に、海彼の隠逸風狂の人物の面影をオーバーラップさせようとしたのかもしれない。いずれにせよ、一句の背後から名乗り出た風狂人が田舎人であるはずがなく、彼はどうあっても都の人でなくてはならなかった。

『三冊子』によれば、芭蕉は、

旅牀の句は、たとひ田舎にてするとも、心を都にして、相坂を越へ、淀の川舟にのる心持、都の便求る心など本意とすべし、とは連の教也

(しろさうし)

と言っていたという(『去来抄』)にも「俳諧は新意を専とすといへども、物の本情を違ふべからず」とある。「春雨の柳は全牀連歌也。田にし取鳥は全く俳諧也(しろさうし)」と述べて、新文芸の成立を宣言した芭蕉が、連歌の教えをそのまま踏襲するはずなかったが、一句の表にはなく、背後に都人である風狂の詩人を配置することによって、「心を都にして」詠んだことは間違いない、伝統文学の言う「旅の本意」は十分活かされている。

かくして、上句「蚤虱馬の尿する」において、伝統文学の詠まなかった「新しい世界を発見」して提示し、更に、下句「枕もと」の背後に都人たる風狂の、旅の詩人を配することによって、「詩的な発見」をして提示したことになるであろう。

## 六

土芳は『三冊子』の中で、

詩哥連俳はともに風雅也。上三のものは餘す所迄俳はいたらすと云所なし。

(しろさうし)

と記したが、まことに、上句「蚤虱馬の尿する」は、「上三のものは餘す所迄俳はいたらすと云所なし」そのままであった。『三冊子』によれば、芭蕉は「俳諧の益は俗語を正す也(くろさうし)」と言っていたという。人は俗語を俗語としてしか用いていない。それでは詩としての発見はないのであ

る。例えば、上句「蚤虱馬の尿する」は、伝統文学の「餘す所」ではあるが、風流でも風雅でもなかった。俗語は俗語として使用せられているだけで、何ら、俗語が正されたわけではない。

しかるに、下句に「枕もと」と置いて、背後に一人の詩人を配した時、一句全体が一瞬にして風雅の詩的世界に組み込まれる。それは風雅というより、むしろ、風狂の世界への止揚である。俗語はここに至って正されたのである。それにしても、一瞬の止揚をしてのける下句「枕もと」はまことに平凡なる語であって、詩語にあらず、歌語にあらず、限りなく俗語に近い語と言うべく、芭蕉はこの語一つを拉致し来って新しい詩を生み出したのである。

川本皓嗣氏は、

一千年に及ぶ伝統のなかで極端に類型化した詩語、どれをとつてもたちまち既定の約束にしたがって、自動的にある一定の感情や想念に翻訳されずにいない歌語のたぐいがそこにあればこそ、俳句のように特殊な短詩型が成立し得たといふべきだろう。

と述べている。氏の言われる通りであろう。しかるに、ここにはそのような詩語もない。「枕」や「草枕」は歌語であるが「枕もと」は歌語ではない。上句「蚤虱馬の尿する」を示された時、下句「枕もと」の語を、そして又、この「枕もと」の語の働きを予測することは甚だ困難であろう。文学とは表現であり、表現とは言葉の組み合わせである。既に定家の『毎月抄』に「詞の用捨」を論じ、「すべて詞に、あしきもなくよろしきも有るべからず。たゞつゞけがらにて、歌詞の勝劣侍るべし」とあり、かような発言は、近世の本居宣長に至るまで、歌人、歌学者に多かつたが、芭蕉も又「発句は取合もの」と知るべし(くろさうし)と言っていたという。「蚤虱馬の尿する枕もと」はそのよき見本である。

## 七

乾裕幸氏は『ことばの内なる芭蕉』(一九八一年四月、未来社)の中で、「俳意説」を展開し、「俳意」は「日常社会に流通している俗語」と「古典文学の中で固定していた雅語」の雅俗両方のことばの間の作用によると

し、川本皓嗣氏は、「互いに矛盾するとしか思えない事物どうしを強引に結び付けること」が「詩の常套手段」であり、「俳句はおおむね誇張（典型）と矛盾（対極）」という、端的で基本的な二種類の意味構造を支えとして、個々のメッセージを伝える傾きをもつ<sup>(9)</sup>とする。しかしながら、例えば、「寒くとも火になあたりそ雪仏」（『犬筑波集』）のごとき句と、芭蕉の句とがかけ離れたものであることは明らかであろう。すぐれた研究者の、すぐれた学説よりも、実作者の方が上回っている場合もあるう。

今、「発句の事は行て帰る心の味也」（くろさうし）という一節を再び想起しよう。「行て帰る」は「蚤虱馬の尿する枕もと」の一句の表面のどこにもあらわれてはいない。それは「心の味」として一句の背後にのみ存在している。土芳の言葉には深い意味があったのである。

なお、「蚤虱」について付言しておきたい。先に、上句「蚤虱馬の尿する」について、蚤と虱は付合語でもあり、意味上はさしたる問題はなく、「馬の尿する」の方が特異な語であると指摘しておいた。しかし、「蚤虱」が何らの情報も提示しないわけではない。それは「家屋」をイメージさせなくもないが、それよりもむしろ、人をイメージさせつつ、下句「枕もと」の背後に居る「風狂の人」へと繋がって行く。

既に、芭蕉自身に「空山に虱を捫りて座す」（『幻住庵記』）、「道中之風流虱の佬」（元禄四年五月一〇日付意専（猿蓑）宛書簡）、「手のひらに虱這はする花のかげ」（『猿蓑』）などと見える（『幻住庵記』の一節は、海彼の『石林詩話』王荆の詩句に典拠があるとされている）。筑前国の僧蓮照のごとく、「多ノ蚤・虱ヲ集メテ我が身ニ付テ飼フ」（『今昔物語集』巻一三ノ二二）。他に『法華験記』巻下、『元亨釈書』巻一二）人物もいれば、僧性空のように、客人が蚤を殺すのを見て大いに悲歎した人物もいた（『古事談』第三）。「しらみほど世をへつらわぬ物はなし」（『醒睡笑』巻一）と言われ、橘曙覧（一八一二—一八六八）は「虱よわがおもふどち」と歌った（『志濃夫廼舎歌集』）。いずれも、蚤や虱と風流風雅の人・風狂人との関わりを示している。

「蚤」「虱」「馬の尿」は確かに苦しい旅の現実を示しているが、逆に言えば、苦しい旅の現実を示すには、必ずしも、「蚤」「虱」「馬の尿」でなくともよかったわけであろう。それゆえ、芭蕉が「蚤」「虱」の語を選択した

時、芭蕉の脳裏に風狂人の面影がちらついていたのではないかと思われる。

## 八

更に「尿する」についても付言したい。先にも触れたごとく、初案がバリコク、バリツクであつたとしても、その卑俗の語を捨ててシトスルに決定したのは、下句「枕もと」の背後に置く風狂の詩人のための伏線でもあつたと考えられなくはないが、又、「佐保姫の春たちながらしとをして」（『犬筑波集』）を想起していたからではあるまいか。念を押しておけば、これに限らず、およそ、芭蕉の脳裏から伝統文学、先行文学のことは一時的にも離れたことはなかつたはずであろう。

尾形仿氏は、

「しとする」が特に小児の場合に限らなかつたことは、『散木奇歌集』の「形こそ人にすぐれめ何となくしとすることもをかしかりけり」、『犬筑波集』の「佐保姫の春立ちながらしとをして」などの例によつても明らかであろう<sup>(10)</sup>。

と述べているが、先に触れたように語の現実日常の用法を詩語に適用しなくともよい。シトの日常の用法がどうかということよりも、句作りの際、『犬筑波集』の句の方が、より強く意識せられたのではないかが問題であつて、井本農一氏が言うような、「この句は馬の小便を人間のよう（いわば「おしっこ」とでも）いったところにおかしみがあり俳諧になっている」<sup>(11)</sup>などということではあるまい。

一体、江戸の文人たちが内外の古典に通じ、その和漢に渉る博学は我々の想像以上であること、周知の通りであつて、芭蕉の場合もその例外ではない。思いがけない旅の一夜、蚤や虱にせせられ、又、母屋内に馬もおり、夜間における馬の尿は、静かな中なのでよい派手な音でもって伝わるのだ——といった意味の表現をしようと考えたならば、たとえ、そのような一夜の体験がなくとも、当年の江戸人にとって、そう困難なしに句作りできるはずのものであろう（それを芭蕉のごとき一句とは為し得ないにしても）。又、一步譲つても、「蚤虱馬の尿する枕もと」一句の素材は、旅の詩

人であつた芭蕉が、おくのほそ道の旅中ならずとも、どこかで周知せずにはすむようなものではなかった。

言うまでもないが、芭蕉に限らず広く文学者たちに通底する古典趣味や伝統尊重、又、作り物としての作品という事実にくら注意してもしすぎることはない。その意味で、新しきものが古きものを乗り越えたとして評価されがちなことを遺憾に思う。芭蕉についても、その伝統を乗り越えた新しい文芸樹立の面が高く評価せられており、それはそれで正しいのだが、実作者たちは相も変らず古いのであつて、その古い面の一層の評価が必要であらう。

ところで、もしかすると、芭蕉が想起していたのは『犬筑波集』の一句だけではなかったかも知れない。『源氏物語』(総角)に次のときとところがある。宇治の八の宮の一周忌がすみ、薫は大君のもとへしのぶが、結ばれることなく朝を迎えた。その場面は左のごとし。

はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声つくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。

「いばゆる音」は馬のいななきを言うが、イバリ、ユバリは尿を言う。観智院本『類聚名義抄』に「尿 ユバリ」、文明本『節用集』に「尿 バリイバリ」、『日葡辞書』に「イバリラスル」などある。

芭蕉が右の「いばゆる音」を尿する意に変えたのか、尿する音と理解してしまつたのかは分らないが、『源氏物語』の一場面は「蚤虱馬の尿する枕もと」の句に何らかの投影があるかも知れない。

今、私が言いたいのは、自説の正当性ではない。例えば、富山奏氏が「およそ伝統的風雅に縁のない辺土の苦しい旅寝にも、旅の意味を感得しての吟<sup>(12)</sup>」と言うような、旅に生きたとされる芭蕉晩年の実体験に引き寄せられた見解に不安を覚えるのである。

我々が芭蕉の実在の旅を意識するのは、已むを得ないところであるが、それでもなおかつ、優れた文芸は旅の中でなくとも、思い切つて言えば、むしろ、書齋の中で作り出される—と言いたいのである。それゆえ、文学研究はできるだけ口がたり、口承の世界や実体験の世界に入り込まず、書承の世界において文献探索を試みたい。

芭蕉の一句も、伝統文学の見捨てて顧みないところを列挙してオリジナルティを主張し、伝統文学に反旗を翻しているかのように見えるが、一句の背後にはまだ気付かれていない伝統文学の世界や古典の精神が脈打っているように思われる。過去の伝統文学の巨人たちがそうであつたように、たとえその身は田舎の中に在ろうとも、心は反田舎、反俗でなくてはならず、いわば、近世の農山村は芭蕉に利用されただけにすぎないのかも知れない。なぜなら、芭蕉の美学は周知のように否定的価値のものに肯定的価値を発見するポーズをとるものであつたから。

笠原伸夫氏は、

美とは俗世と対峙し、俗衆を嫌悪することによってきわだつ、という機能をもっている。美が第一に否定するのは世俗的価値観であり、美に殉ずるというのは、俗世を超えようとする意志の謂であつた。<sup>(13)</sup>

と述べている。近世の農山村の現実生活が貧苦にあえぐものであり、そのような貧苦(否定的価値)の中に、満足や快楽を発見するようなものでなかつたことは明らかである。

一体、芭蕉は演技的人物であつて、その演技の舞台として田舎が選ばれたふしがある。芭蕉に特有の高揚した口吻や演技意識は、彼が敬慕した増賀や玄寶や西行らに対する劣等意識から来るものであつたように思われるのであつて、彼らの一途な仏道心、作り物でない自然な生き方(と芭蕉は思っていたらしい)は、どうしても乗り越えることができないものとして重くのしかかつていたのであるまいか。

## 九

芭蕉はしばしば「骨折たる処」、「ほね折たる句」、「数日はらわたをしはる」、「寸々の腸をさく」、「老吟のほね」、「粉骨の所」、「心のほね折、人のしらぬ所也」(以上『三冊子』)などと発言した。『更科紀行』の周知の一節は左のごとし。

夜は草の枕を求めて、昼のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨たる発句など、矢立取出て、灯の下にめをとぢ、頭たゞきてうめき伏せば、かの道心の坊、旅懐の心うくて物おもひするにやと推量し、我をなぐ

さめんとす。

又、許六の「俳諧自讃之論」（『俳諧問答』所収）によれば、「我骨髓より油を出す」とも言った由。今、それらの発言を想起する時、「蚤虱馬の尿する枕もと」の一句は、『おくのほそ道』全篇の眼目というのみならず、芭蕉終生の自信作であつたかと思われる。

注

- (1) 尾形仍氏「おくのほそ道注解二十五（尿前の関）」（『解釈と鑑賞』第三二巻第一号、昭和四二年一月）。
- (2) 荻原井泉水氏『奥の細道ノート』（新潮文庫）八八頁。
- (3) 鑑賞日本古典文学 第二八巻『芭蕉』三五〇頁。
- (4) 尾形氏、注（1）論文。
- (5) 前田金五郎氏「俳諧用語考」（『連歌俳諧研究』第二〇号、昭和三年一〇月）。
- (6) 太田絃子氏「へ尿する」考」（『解釈』第一八巻第六号、昭和四七年六月）。
- (7) 山下一海氏『芭蕉の世界』（昭和六〇年七月、角川書店）一二五頁。
- (8) 川本皓嗣氏「俳句の詩学（一）十七字で言えること」（『文学』第五七巻第一号、一九八九年一月）。
- (9) 同右。
- (10) 尾形氏、注（1）論文。
- (11) 鑑賞日本古典文学 第二八巻『芭蕉』三五〇頁。
- (12) 新潮日本古典集成『芭蕉文集』一三三頁 注一七。
- (13) 笠原伸夫氏「泉鏡花、美意識の基層へ」（『解釈と鑑賞』第四六巻第七号、昭和五六年七月）。

（平成二年十月二十二日受理）